



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	インターネットカフェにおけるパーソナライゼーションに関する基礎的研究
Author(s)	有吉, 洸; 森, 傑
Citation	学術講演梗概集. E-1, 建築計画I, 各種建物・地域施設, 設計方法, 構法計画, 人間工学, 計画基礎, 2011, 17-20
Issue Date	2011-07-20
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/54900
Rights	日本建築学会. 本文データは学協会の許諾に基づきCiNiiから複製したものである.
Type	journal article
File Information	AIJ.E-1(2011).17-20.pdf



インターネットカフェにおけるパーソナライゼーションに関する基礎的研究

正會員 ○有吉 洸*

同 森 傑**

パーソナルスペース パーソナライゼーション
就寝 レイアウト インターネットカフェ

1. 背景と目的

近年の日本では、若い世代を中心に、インターネットカフェで一晩を過ごすという新しい就寝のスタイルが市民権を得つつある。一般的にインターネットカフェのブースは一畳程度の広さであるが、「風俗営業等の規制及び業務の適正化等に関する法律」の適用を回避するため、各ブースは壁ではなく人の背丈程度のパーティションで仕切られており、基本的に出入口を施錠することもできない。このような状況のもとで、各自が居場所・寝場所を成立させるには、ブースの利用者が提供される空間に対して積極的な工夫を行い、プライバシーが確保される私的領域を構築する必要がある。

私的領域を扱った研究には、子供病室における家具レイアウト実験を扱った今井らの研究¹⁾や、個室型特別養護老人ホームにおける個室内の個人的領域を扱った橘らの研究²⁾、自然災害に伴う環境移行を扱った三浦らの研究³⁾などがあるが、インターネットカフェのように、短時間で形成される仮設的な領域によって、就寝のような非常にプライベート性の高い行為を成立させ得る、という特殊な性質を有する空間を対象とした研究はまだない。

そこで本研究では、インターネットカフェのブース内に形成されている私的領域を研究の対象とし、ブースの物理的な実態と特徴を把握し、実際の利用時における具体的なブースの使われ方を分析することで、インターネットカフェにおけるパーソナライゼーションに関する基本的な知見を得ることを目的とする。

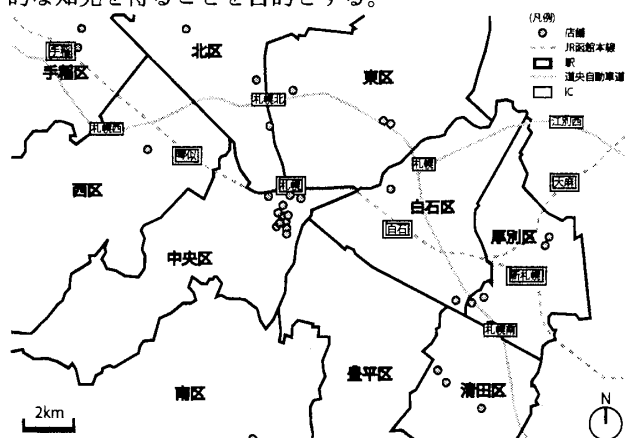


図 1. 調査対象の分布

2. 札幌市におけるインターネットカフェの空間的特徴

2-1. 調查概要

本研究では札幌市のインターネットカフェを調査対象とし、市内にある店舗を抽出した。その結果札幌市には、中央区12、北区3、東区3、白石区2、厚別区4、豊平区0、清田区3、南区1、西区1、手稲区2の、合計31店舗があることが分かった(図1)。

これらの店舗が提供しているブースの物理的実態を把握するために、抽出した31店舗について実地調査を行った。調査期間は2010年6月22日(火曜日)～11月2日(火曜日)とした。調査対象の店舗に実際に赴き、店舗の形態、提供されているブースの種類、各ブースの寸法、装備されている備品・サービスの状態などを記録した。

2-2. 空間的特徴と分類

調査の結果、札幌市内のインターネットカフェが提供しているブースは大きく「リクライニング」「フラット」「デスク」「ソファ」「マッサージ」「フラットチェア」「プレミアム」の7種類に分類できることが分かった。これらのブースの各種寸法の平均値を表1に示す。

また、ほぼ全ての店舗が「リクライニング」型のブースと「フラット」型のブースを提供している実態が見られた。さらに「リクライニング」と「フラット」には、机がブースの手前側に設置されているタイプと、奥側に設置されているタイプがあった。よって本稿では、前者を「A型」、後者を「B型」と呼ぶことにした。なお、これら4種類のブースの数がほぼ同数であったことから、本稿では「リクライニングA型」「リクライニングB型」「フラットA型」「フラットB型」の4つを、札幌市内のインターネットカフェにおける基本的なブースとして位置づけた(図2)。

表 1. 各種ブースの寸法 (平均)

タイプ	幅(mm)	奥行(mm)	バーティション(mm)	面積(m ²)
リクライニング	1136.9	2015.4	1618.9	2.29
フラット	1242.5	2019.2	1528.8	2.51
デスク	1078.5	1726.0	1544.0	1.86
ソファ	1712.5	1773.7	1727.9	3.04
マッサージ	1030.8	2194.4	1611.7	2.48
フラットチェア	1065.0	1940.0	1320.0	2.07
プレミアム	1667.5	1857.5	1700.0	3.10

3. 利用実態調査

3-1. 調査概要

実地調査で得た4つの基本的なブースの利用実態を把握するために、実験的な利用に基づく実態調査を行った。調査期間は2010年10月26日(火曜日)～11月9日(火曜日)とした。調査対象は、面積とパーティションの高さが同程度のブースを市内の31店舗の中から抽出し、表2に示す4つのブースに決定した。実験の被験者は、過去にインターネットカフェに宿泊した経験を持つ北海道大学の学生8人(男性4人、女性4人)とし、1人あたり2カ所のブースを割り当て、実際にそのブースで一晩過ごしてもらい、利用中に荷物・備品などをブース内のどこに置いたか、どこに動かしたか、といった事柄を記録用紙に記述するとともに、可能な限り写真撮影を行い、ブース内の状態を記録してもらった。また記録する場面は、「利用開始直後」「安定状態」「シャワー室利用中」「仮眠時」の4場面とした。なお、「安定状態」は、利用を開始してから1時間が経過した状態、「仮眠時」は、仮眠をとる直前の状態とした。

3-2. 分析の方針

この実験で記録した4つの場面の中では、「仮眠時」において、「就寝」という行為を成立させることが、一般的には最も困難であり、利用者の環境に対する働きかけが最も顕著になると考えられる。よって、4つの場面から、「安定状態」と「仮眠時」の2場面を選択し、両者を比較しながら分析を行う(図3)。

またブース内に形成される私的領域を分析するにあたって、利用実態調査の対象とした4種類のブースが持

つ空間的な特徴に注目する。

1) 椅子の形態

対象としたブースには「リクライニング」型と「フラット」型の2種類があり、椅子に座った状態で過ごす場合と、平らな床の上で過ごす場合とでは、動くことの出来る範囲や姿勢の取り方といった、行動の自由度に対する制限の度合いが異なる。そのため、構築される私的領域にも差異が生じると考えられる。

これを踏まえて、身体的制限の程度差によって生じるパーソナライゼーションの傾向の違いについて分析する。

2) 出入口の位置

対象としたブースには「A型」と「B型」の2種類があり、万一の場合に他人の侵入が予想される方向がそれぞれ異なる。そのため利用者の前方に出入口がある場合と、無防備な後方に出入口がある場合では、利用者の心理面に与える影響が異なり、構築される私的領域にも差異が生じると考えられる。

これを踏まえて、心理的制限の程度差によって生じるパーソナライゼーションの傾向の違いについて分析する。

3-3. 分析結果と考察

3-3-1. 身体的制限

「リクライニング」型の事例を見ると、事例1～4、9、11、12は、机を中心とした一定の範囲に物品を配置している。これらの事例では、安定状態と就寝時を比較しても、物品の配置されている範囲に大きな変化は見られない。

一方「フラット」型の事例を見ると、全ての事例で、安定状態から仮眠時に移行する際に、物品の配置される範囲の拡大が見られる。事例5、6、16では、仮眠時にブースのおよそ半分、それ以外の事例では、ほぼブース全体に物品の配置が広がっている。

身体的制限の程度と物品の配置される範囲について、各事例ごとに整理すると図4のようになる。

ここから、「リクライニング」型のように行動の自由度が低く、身体的制限が比較的大きな場合には、椅子の周辺に限定的な私的領域が構築され(図5)、逆に「フラット」型のように行動の自由度が高く、身体的制限が小さい場合には、構築される私的領域の範囲は広くなる(図6)傾向

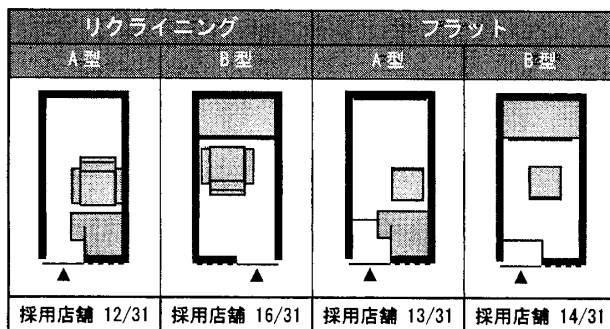


図2. インターネットカフェの基本的なブース

表2. 利用実態調査対象の基本情報

タイプ	店舗	幅	奥行	パーティション	面積
リクライニング	A型 自遊空間 アーバン札幌店	1050mm	2150mm	1530mm	2.26㎡
	B型 ゲオカフェ 狸小路店	1150mm	2000mm	1610mm	2.30㎡
フラット	A型 自遊空間 南2条店	10040mm	2180mm	1510mm	2.27㎡
	B型 コミックランド 時計台店	1070mm	2000mm	1650mm	2.14㎡

があると考えられる。

3-3-2. 心理的制限

1) ブース出入口付近の物品の配置について

「A型」の事例を見ると、事例3は出入口付近に鞆(1)と漫画(9)を、事例6、7は、ブース出入口付近にゴミ箱(32)、漫画(9)、座椅子(19)などを配置しているが、残りの5事例では、出入口付近への物品の配置は見られない。

一方B型の場合、事例10、12ではブース出入口付近にリクライニングチェア(17)や、袖机(51)が、事例13～15では共通して座椅子(19)が配置されるなど、事例9、11、16を除いた5事例において、ブース出入口付近に対

する物品の配置が見られる。

心理的制限の程度と出入口付近に対する物品配置の有無について、各事例ごとに整理すると図7のようになる。

2) 貴重品の位置について

A型の場合、事例5で、仮眠時に鞆(1)と携帯電話(5)がブース奥に移動している以外には、貴重品は大きく移動していない。

「B型」の場合、事例9、13では、鞆(1)がブース奥に移動している。また事例10、12、15では、携帯電話(5)が入口から死角となる、リクライニングチェア(17)の座面上や座椅子(19)の裏などに移動している。

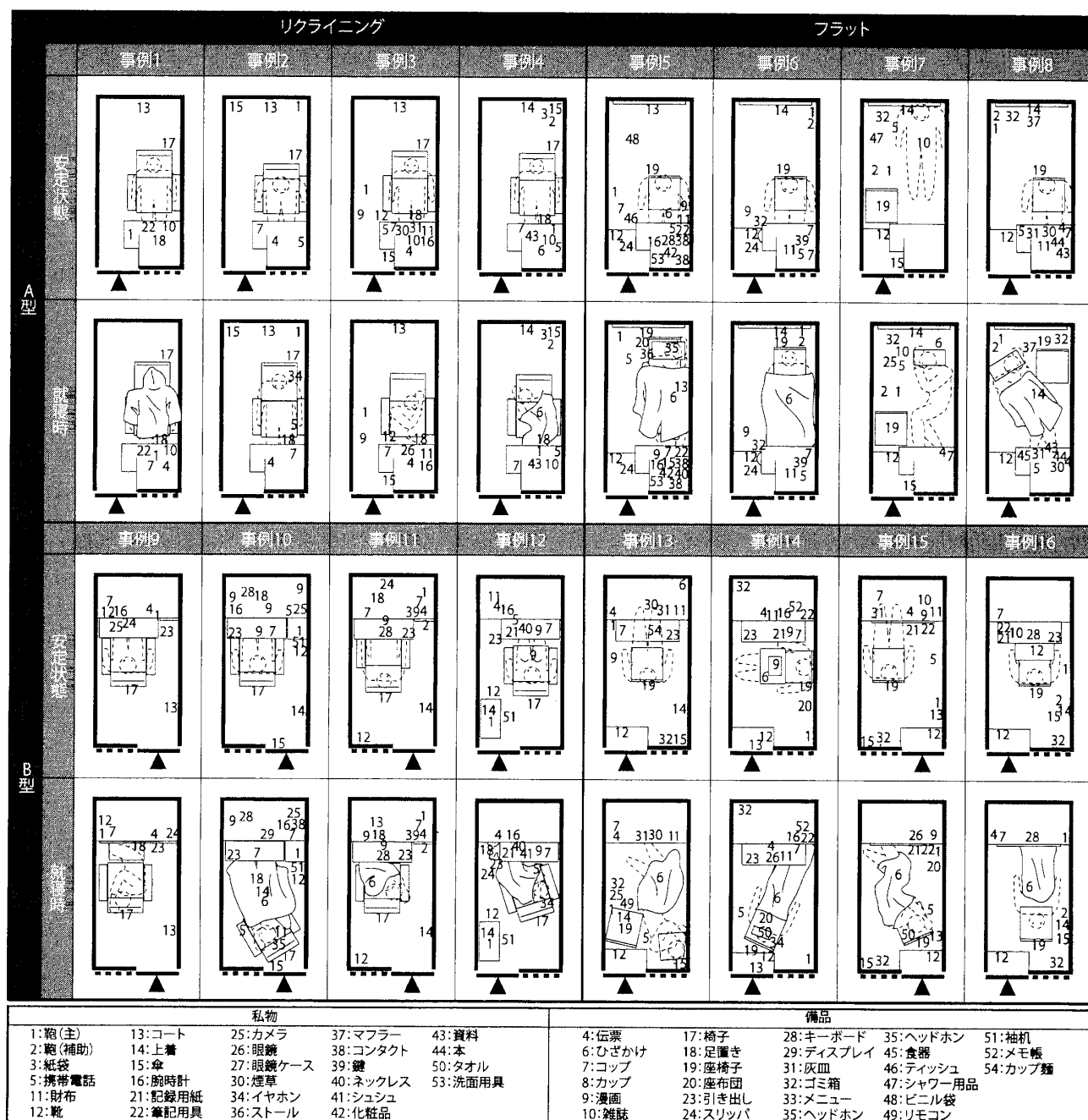
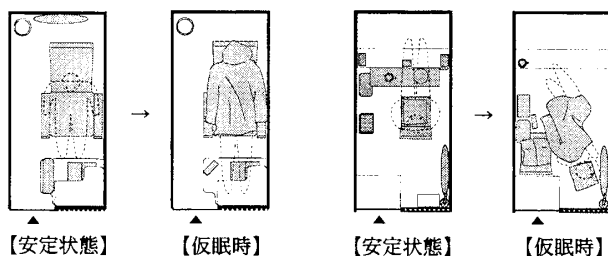
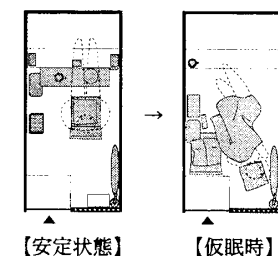


図3. 利用実態調査結果 / 安定状態・仮眠時

	リクライニング				フラット			
	事例1	事例2	事例3	事例4	事例5	事例6	事例7	事例8
A型	限定 (図5)	限定	限定	限定	拡大	拡大	拡大	拡大
	← 身体的制限大 →				← 身体的制限小 →			
B型	限定	拡大	限定	限定	拡大 (図6)	拡大	拡大	拡大

図4. 身体的制限と物品の配置範囲


図5. 身体的制限が大きい
場合 / 事例1

図6. 身体的制限が小さい
場合 / 事例13

心理的制限の程度と仮眠時の貴重品の移動について、各事例ごとに整理すると図8のようになる。

図7・図8から、A型のように心理的制限が比較的小さい場合は、仮眠時にブース出入口付近に物品を配置する傾向や、貴重品を出入口から遠い位置、または死角となる位置に配置する傾向は弱い(図9)が、B型のように心理的制限が比較的大きい場合は、万一の他者の侵入を懸念した物品の配置・移動を行う傾向が強い(図10)と考えられる。

またブース出入口付近に配置される物品の種類は、構築されている私的領域の範囲に関係していると考えられる。例えば、入口付近に何も配置されない場合、私的領域はブースの範囲よりも小さい。私的領域が拡大すると漫画やゴミ箱などが出入口周辺に領域を示すために配置されるようになる。椅子や袖机といった物理的なバリケードとなりうる物品が配置される段階では、利用者はほぼブース全体を私的領域と捉えていると考えられる。

4. まとめ

本研究により、インターネットカフェにおけるパーソナライゼーションについて、以下に挙げる大きく2点の基本的な知見を得た。

1) 「フラット」の事例では、就寝の際、ブース内のより広い範囲に物品を配置する傾向が、「リクライニング」の事例よりも強く見られた。このことから、ブースの利用者が受ける身体的制限の大きさが、構築される私的領域の広がり

	リクライニング				フラット			
	事例1	事例2	事例3	事例4	事例5	事例6	事例7	事例8
A型	無し	無し	有り	無し (図9)	無し	有り	有り	無し
	↑ 心理的制限小 ↓							
B型	無し	有り	無し	有り	有り	有り	有り (図10)	無し
	↑ 心理的制限大 ↓							

図7. 心理的制限と出入口付近への物品の配置

	リクライニング				フラット			
	事例1	事例2	事例3	事例4	事例5	事例6	事例7	事例8
A型	有り	有り	無し	無し (図9)	無し	無し	無し	無し
	↑ 心理的制限小 ↓							
B型	有り	有り	無し	有り	無し	無し	有り (図10)	無し
	↑ 心理的制限大 ↓							

図8. 心理的制限と仮眠時における貴重品の移動

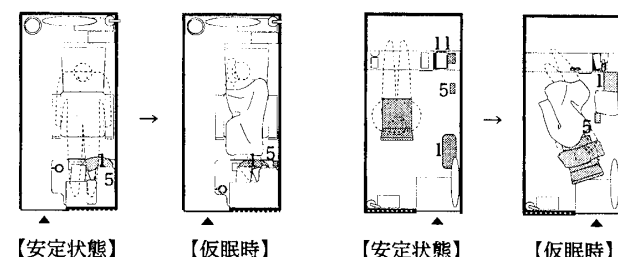

図9. 心理的制限が
小さい場合 / 事例4

図10. 心理的制限が
大きい場合 / 事例15

に影響を与えている可能性があると考えられる。

2) 「B型」の事例では、就寝の際、出入口付近に物品を配置する傾向や、貴重品を出入口から遠ざける傾向、あるいは死角となる位置に移動させる傾向が、「A型」の事例よりも強く見られた。このことから、ブースの利用者が受ける心理的制限の大きさが、私的領域の構成の仕方に影響を与えている可能性があると考えられる。

今後は、隣接するブースや通路、他の利用者といった、周囲の環境も考慮し、調査や実験の方法を洗練させ、より実証的な分析へと展開していく必要がある。

- 1) 今井正次：小児の病室における家具の「レイアウト実験」 テリトリーからみた病室計画に関する研究，日本建築学会計画系論文集，2003年，pp.147～154
- 2) 橋弘志：個室型特別養護老人ホームにおける個室の個人的領域形成に関する研究，日本建築学会計画系論文集，1997年，pp.133～138
- 3) 三浦研：災害復興住宅における個人領域の形成に関する調査研究 93年北海道南西沖地震の被害を受けた奥尻島の事例を通して，日本建築学会近畿支部研究報告集，1997年，pp.177～180

* 北海道大学大学院工学院・修士課程
* 北海道大学大学院工学研究院・教授・博士（工学）

* Graduate Student, Graduate School of Eng., Hokkaido Univ.
* Prof. Faculty of Eng., Hokkaido Univ., ph.Din Eng.